

委員会調査(研修)報告書

NO.

令和7年6月6日

胎内市議会議長
八幡元弘様

(報告者) まちづくり常任委員会
委員長 増子達也

まちづくり常任委員会閉会中所管事務調査 について、
議会会議規則第110条により、下記のとおり報告します。

調査・研修 日時	自 令和7年5月21日 至 令和7年5月21日 泊 日 (日間)	調査・研修 場所	1、ロイヤル胎内パークホテル 2、胎内高原ハウス株式会社 3、旧活性化センター
調査・研修 事項	1、ロイヤル胎内パークホテル グランピング施設 2、胎内高原ハウス株式会社 第一工場、第二工場 3、旧活性化センター		
調査・研修 出席者(参加者)	議員：増子達也、丸山孝博、渡辺宏行、天木義人、渡辺秀敏、 森本将司、坂上隆夫、八幡元弘 事務局：佐藤局長、高橋知也参事		
相手方(対応者)	1、ロイヤル胎内パークホテル 増子和弘課長、斉藤紀仁係長、大矢晴香 ((株)胎内リゾート) 2、胎内高原ハウス 佐藤利勝課長、速水隆係長、本間工場長(第一工場)、 水沢工場長(第二工場)		

調査の結果または概要

1、ロイヤル胎内パークホテル グランピング施設

前回の委員会調査時は工事中であったグランピング施設も完成しており、令和7年3月14日(金)からプレオープン、4月1日よりグランドオープンとなり宿泊客の受け入れを開始している。料金は大人一人あたり27,500円(税込)からで、調査日前日の宿泊人数と予約を含めた累計は17組42名であった。

テントは左右両端に1張ずつ計2張あり、そのほかにサウナや水風呂、既存施設をそのまま利用したシャワーやトイレがあった。

テントの名前は「ソラ(SORA)」と「モリ(MORI)」であり、その名をイメージするような工夫がされていた。「ソラ」には夜空を楽しむ望遠鏡が、「モリ」には茶色で統一された空間に観葉植物が配置されていた。

費用はテント2張で約1,200万円、ウッドデッキ約1,300万円、空調や電気工事などで約1,200万円との事であった。

2、胎内高原ハウス株式会社

①第一工場

工場内は見学や視察を想定したような作りになっており、2階から工場内を見下ろせるので、状況が把握しやすく、また、ステンドグラスなども設置されており、見学者に対しての工夫もされているようであった。

硬度14mg/lの日本でも有数の軟水が特徴であり、500mlの他、1.5l、2lも製造している。

6割が自社製品で残りの4割がPB(プライベートブランド)であり、水の他、麦茶、緑茶の製造もおこなっている。

設備は22年を経過し老朽化が顕著化していて、現在は、殺菌・冷却・充填に不具合が見られ、今後修繕を予定している。

日に500mlで500ケースほど生産できるのだが、設備の不具合や人手不足などで400から450ケースの生産しかできていない。

近年の防災意識の高まりを受け、保存水の引き合いが多くなってきているが、生産能力不足のため待ってもらったりしながら対応しているとの事であった。

また、大手以外でお茶を作る工場は少ないそうで、中小の企業から見た胎内高原ハウスは貴重な存在だとの事であった。PBでも交渉中の企業も多く、引き合いもあるが、設備の老朽化や人手不足(現在のスタッフは4名)などもあり、考えながら進めているとの事であった。

②第二工場

令和元年度操業の比較的新しい工場であった。

硬度34mg/lの軟水で、保存水を主に製造している。

500mlのみで、6年間保存できるものと7年間保存できるものの2種類を製造している。

取引先は、防災関連の商品を取り扱う県外事業者が約6割であり、残りの4割が県内事業者で大手スーパーなどである。

昨年夏頃にブロー生成機(ペットボトルを金型の中で膨らませ作る機械)が故障したため、現在は、完成したペットボトルを業者から購入し、1本1本手作業でセットしながら製造している。業者から購入したペットボトルは生成機で作るより2倍の費用がかかるとの事で、

現在修理を検討している（修理費約 2,700 万円）。

年間の製造能力は 3 人～4 人のスタッフで 400 万本であるが、人手不足のため現在は 3 割程度の製造しかできていない（日で 700 ケースのところ現在は 300 ケース（1 ケース 24 本））。保存水の需要はまだあるのだが生産が間に合っていないのが現状との事であった。

3. 旧活性化センター

外観はまだまだ見えそうに見えたが、室内に入ると、雨漏りのせいなのか所々天井は抜け落ち、壁紙は剥がれ、床には天井ボードが散乱し、歩いてみると床は柔らかく、どこにいてもカビ臭が鼻をつき、使える状態ではなかった。

調査の所見・感想

1. ロイヤル胎内パークホテル グランピング施設

敷地内で焚火やバーベキューができないのは少し残念に思うところであるが、手ぶらでキャンプができる施設で、ホテルの温泉や施設も利用でき、すぐ近くに専用サウナがあるのは魅力的である。

解体費用も含めた工事の総額は約 2 億 5 千 100 万円（工事費 241,992,300 円、工事委託費 9,273,000 円）であることから、解体費用やテントを設置するまでの基礎工事にかかる費用が大半を占めたのだろうと感じた。

利用者のアンケートを実地しているようなので、実際の声に耳をかたむけ、多くの人に喜ばれる施設になるよう、また、胎内市の観光に資する施設になるよう期待したい。

2. 胎内高原ハウス

第一工場は施設の老朽化で本来の生産能力が発揮されていない。

第二工場では人手不足が深刻化しており、こちらも本来の生産能力が発揮されていない、人手不足により安全面でも不安が残る。また、第一工場同様に機械の不良で生産能力がさらに落ちている。

第一第二工場ともに本来の生産能力はまだあるにも関わらず、全てが発揮されていない。

施設の不良、人員不足は早急に改善されるべき課題であると感じた。

近年の防災における関心度の高さから、保存水の需要は高まっている。安定した経営にはある程度の規模が必要だ、需要があり供給が不足しているならば、供給能力を上げることでにより経営は改善するだろう。今は縮小ではなく新たな投資が必要な時ではないかと感じた。胎内高原ハウスのさらなる発展を期待する。

3. 旧活性化センター

胎内の観光エリアに位置し、景観の良い建物であっただけに、室内の状態の悪い旧活性化センターには心が痛んだ。

修理して使うより解体したほうが費用は安くすむようだ。

解体に時間がかかるようならば、老朽化が進み危険な建物となった場合の管理も考える必要があるだろう。また、そうなれば費用もかさむ。

解体し更地にすればそれで良いのだろうが、遊休施設の維持管理も見直す必要があるのではないかと感じた。